

現代日本の国語教育における五十音図の使用

Attanayake priyanthika

要旨

日本語の「五十音図」は、現代国語教育において重大な役割を果たしているといえる。よって本論文では、日本語の五十音図が国語教育で果たしている役割を探る。まず現代国語教育でこれをどのように学習するかについて考察する。そのために、実際に使用されている小学校の国語教科書を見ていく方針をとる。また、日本語教育での使われ方についても見る。

小学校の「国語」においては最初に五十音図が教えられる。小学校では、平仮名と片仮名は五十音図を通じて学び、それに基づいてコンピュータで文字を入力するときのローマ字の使用法、ローマ字の「点字の表」「指文字のれい」などを学習する。

一方中学校では、五十音図は、仮名文字を規則的に並べたものであると同時に日本語の音節を規則的に並べたものという認識を学ぶ。またその原則として、横の列（段）に同じ母音が、縦の列（行）に同じ子音が並べられ、母音のみのア行以外は「t o」「r i」のような「子音+母音」で作られていることや日本語の音節は五十音図に示されていることを学習し、五十音図についてより具体的に把握していく。次に、五十音図によって古典文法の活用を学習する。その時に五十音図の歴史もおおまかに学び、五十音図で歴史的仮名遣いと現代仮名遣いについても学ぶ。高等学校では、五十音図により現代仮名遣いと歴史的な仮名遣いについて学び、大学では専門により専門的に、その歴史などを学ぶのである。文字、音節のみならず、仮名遣い、活用や日本語の歴史の導入までが五十音図に基づいて行われている。こうした利用は日本語教育や音節表を持つ他言語の教育においてはみられない。

1. はじめに

インドの音声学「悉曇学」を基本にして作られた「五十音図」は、母音を基本に縦に五字、子音を基本に横に十字並べたものであり、二つの座標軸で仮名文字を決める構成をもっている。本来、漢字の音を示す手段である反切を説明するものとして「五音図」が平安時代に考案されたが、その体系は、後に日本語の音韻体系の説明に使用されるようになった。今では、日本語の音節構造を把握するための表であると考えられる。

長い歴史を持つ日本語の「五十音図」は、現代日本語において様々な面で重要な役割を果たしているといえる。しかしその位置づけの現状や過程について具体的示した研究は少ない。よって本論文では、日本語の五十音図が国語教育で果たしている役割を探る。そのため、現在使用されている小学校の国語教科書を見ていく方針をとる。現在使用されている国語教科書が5種類ある。教育出版『ひろがることば』、大阪書籍『国語』、学校図書『こくご』、東京書籍『新しい国語』と光村図書『こくご』である。これらの5種類を本研究での調査対象とする。まず、これらの教科書を小学校、中学校と高等学校という順に出版社とともに見ていく方針を取る。また、日本語教育での使われ方についても『みんなの日本語』と『新日本語の基礎』の二冊を中心に考察を行う。

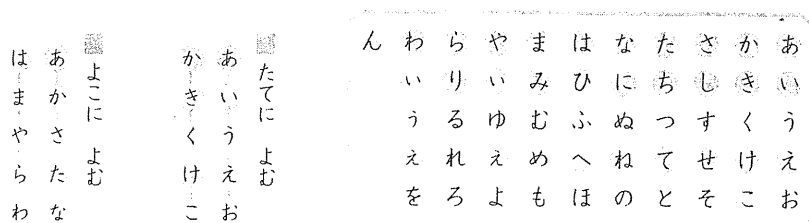
2. 日本の国語教育における五十音図

2.1 小学校

2.1.1 教育出版『ひろがることば』

小学一年生はまず「あいうえお」5音の発音を練習し、次にその「あいうえお」を含む単語をいくつか覚える。「あいうえお」の発音練習の後、「つ、り、こ」などの簡単に書ける文字から文字の書き方を習い、それから「あいうえお」の書き順を覚える。その後にしりとりなどで文字とともにその音が入った単語も覚える。そして全文字が入った「五十音図」が示され、縦の読みと横の読みについて記載されている文字の色の違いで認識する。ここでは「か」が伸ばすと「あ」で終わるので「か」と「あ」が同じ仲間であることも認識する。その五十音図が以下の図1である。

図1



教育出版『ひろがることば』小学一年・上 p. 22

その後は未習の文字を五十音図によって学習する。「あいうえおのうた」が記載され、それによって全ての「五十音図」を平仮名で覚えるのである。それから濁音、半濁音と拗音も習う。平仮名で「五十音図」について理解した後に片仮名を学習する。次に漢字を習い始める。小学一年の国語教科書の最後のページに五十音図が「かたかなのひょう」と「ひらがなのひょう」という名称で記載されている。

片仮名については書き順を習い、音や泣き声、食べ物、乗り物などの片仮名のことばを学習する。その後、「を」と「お」や「わ」と「は」の使い分けについて文から把握する。さらに間違えやすい片仮名と平仮名について学ぶ。

教育出版による教師用指導書では、「あいうえお」について、母音を正しく適切な声の大きさと発音し、鉛筆の持ち方から文字の大きさも含め、基本的なことを丁寧に身につけさせたいと述べている。また字形の簡単な平仮名を集めて、基本的な線の練習から始めていくことにするとされている。その基本としてまず、母音で始まる言葉の絵（二音節）、それから母音の字形を示す写真から学習を始める。そこで学習する平仮名の画数に応じてみるようにしている。例を以下に示す。

一画の平仮名「く」「し」「つ」、二画の平仮名「い」「う」「え」「こ」、三画の平仮名「あ」「お」 (小学一年・上、p. 11)

なお、平仮名「五十音表」の縦の読みと横の読みを習い、色別で示している平仮名を読みながら、母音の発音をもう一度認識させ、さらに「やいゆえよ」と「わいうえお」の特徴についても触れるようにするとされている。助詞の「を」「は」とオ列長音「う」とエ列長音「い」を、脚注で取り上げているがそれらについての音読・視写をそれぞれの段階で丁寧に指導し、さらに「かたかなのひょう」では、「ひらがなのひょう」を思い浮かべ、それとの違いを考え、音としてまったく同じだが、文字が異なることに触れておくといふとされ、五十音の表は、辞書を引く際にも覚えておく必要がある説明する。

清音、濁音、半濁音の違いで、意味が異なる「か・蚊」、「が・蛾」のようなもの習うとされている。その後で、促音や長音が適切に使えるよう学習する。音声言語と文字言語の両面から理解を深めるようにしたいと言っている。

小学二年では片仮名で書く言葉について、片仮名は外国のことばから日本語に入ってきたことばやものの音や動物の鳴き声などを記すことを習う。さらに正しい声を出す練習によって五十音図をより深く学ぶ。また教育出版による教師用指導書では、『ひろがることば』の教材は次のような内容によって構成されるとする。

1. 詩を音読することで、子供が自分から発音しにくい言葉を見つけて、学習を進めていくことによって正確に発音できるように展開したい。
2. 発音しにくい音を含んだリズムカルで親しみやすい言葉や文、早口言葉を示して、発音の練習をする。発音がまぎらわしい言葉を「イ」と「シ」「ス」と「サ」正確に発音することや同音の繰り返しによる発音しにくい早口言葉を学習するようにしたい。(小学二年・上、p.23)

小学三年では、国語辞典が五十音順になっていること、濁音は清音の後、半濁音は清・濁音の後、その後に拗音や促音であることを学習させる。教師用指導書では、送り仮名を正しく使うときに動詞の活用に五十音図を使うことを以下のように説明している。

五段活用の動詞の場合、五十音表の五段にそって語形が変化する点。

例：ラ行五段活用

帰る	
帰	(ら) ない
	(り) ます
	(る) とき
	(れ) ば
	(ろ) う
	(っ) た

マ行五段活用

読む	
読	(ま) ない
	(み) ます
	(む) とき
	(め) ば
	(も) う
	(ん) だ

(教師用指導書・小学2年・上・研究編、p.109)

コンピュータで文字を入力するときにローマ字の使用を、五十音図を使用し学ぶ。のぼす音、つまる音、小さい「っ」や「ん」などの入力方法も習う。教師用指導書によると、ローマ字は音素文字（単音文字）であり、表記は各母音及び子音の組み合わせによることを理解させるとされている。ここで初めて、生徒は母音と子音という認識する。

小学四年では五十音図をローマ字で習う。その時に用いられるのが訓令式のローマ字の表である。「ローマ字表」の名称で提示されている表にはローマ字の五十音図の下に平仮名を小文字で提示している。「Ro`mazi-hyo」という名称で用いられている五十音図はローマ字のみを提示し、異なるつづりがあるものは小文字で提示している。しかし五十音図中に存在する音のみにローマ字を当てるので「F」「J」などの文字は習わない。また五十音図を使用し「点字」も習う。点字は、六つの点の組み合わせで五十音を示す。濁音と半濁音は、それぞれもとの清音の左に、決まった点の一つ加えて示す。

小学五年では五十音図を使用する単元はなく、小学六年では送り仮名の決まりや「日本語の文字」として、漢字、万葉仮名、平仮名と片仮名、平仮名と片仮名の使い分け、ローマ字や漢字と平仮名の組み合わせについて学習する。

2. 1. 2 東京書籍『新しい国語』

東京書籍『新しい国語』でも教育出版と同様に小学一年生はまず「あいうえお」の5音の発音練習をした後に「あいうえおのうた」が記載され、それによって「五十音図」を覚える。それから「あいうえお」を含めた単語をいくつか覚える。「あいうえお」の発音練習の後、「いし」「うし」などの簡単に書ける文字から文字の書き方を習い、それから「あいうえお」の書き順を覚えるのである。その後に文字とともにその音が入った単語も覚える。そして濁音・半濁音を含む、全文字が入った「五十音図」が示され、縦の読みと横の読みについて記載されている文字の色の違いで認識させる。その後はまだ書き方を習ってない文字を五十音図によって習い、濁音、半濁音と拗音も習う。小学一年の国語（下）の最後のページに五十音図が「ひらがなのひょう」という名称で記載されている。片仮名の書き方を習い、全ての清音を片仮名で習った後にのばすしるしを「ノート」などの例から習い、つまる音の「ツ」については、「マッチ」などの単語から習う。教科書の最後のページに片仮名での五十音図を「カタカナのひょう」として提示している。

教師用指導書で教材は、「あいうえお」で音節を意識させてから、「じをかこう」で書く活動をする展開になっていると述べられている。そして、平仮名を書く練習をしていき、六月上旬には、五十音すべての平仮名を書けるように、学習を進めていく。「あいうえお」については、母音の発音練習、さらに、ひとまとまりの語として発音ができるようにしていくとされ、また言葉のおもしろさを感じ取り、濁音・半濁音の学習を楽しく進めることができるようにしたいと説明する。

「みんなであいうえお」では、色別に五十音図で縦読みと横読みの練習をする。教師用指導書には縦に読むことで、行としてのまとまりを意識し、横に読むことで、段としてのまとまりを意識するように説明する。さらに、各行をのばして読むことで、それぞれの行の母音が「アイウエオ」となることを知り、これらの読みをすることで、五十音表の構成を確実に理解していくようにしたいという。

小学二年になり、片仮名で、外国の地名、人の名前、外国から来た言葉などを書くことを習い、片仮名についてより深く学習する。また、教師用指導書によると、片仮名で書く言葉にどんなものがあるかについて整理し、片仮名への理解をより深めると記述している。

小学三年では、国語辞典は五十音順になっていることを学習する。教師用指導書では、「五十音順並べ替えゲーム」が提案されている。言葉を並べ替えることは、国語辞典の引き方や引く速度を上げるなどとされている。さらに点字の表を五十音図で提示している。

小学四年では、まず、ローマ字のみの「Ro'mazi-hyo」を習い、それから平仮名も提示している「ローマ字の表」を学習する。小学五年では、「ローマ字の表」からコンピュータで日本語の入力方法を学んでいく。小学六年では、ローマ字の表を再び学習する。

教師用指導書によると、ローマ字の長音を表記する場合、母音の上に〔ˆ〕をつけて表すこと、片仮名の「ー」については明確であるが、平仮名の言葉については、オ列の長音（お父さんーおとうさん）は、発音と同じように表記することを指導するとともに、ある程度ゆるやかに判断するように配慮するといっている。

2. 1. 3 学校図書『こくご』

小学一年では、「あいうえお」の母音を練習した後に「あいうえおのうた」からさらに母音

を学習する。その後、「つくし」「ことり」「つの」の単語から文字の学習を始める。清音を身につけた後に〔[˙]〕のつく字、や〔[˚]〕のつく字を学習する。のばす音について「おばさん」と「おばあさん」などの単語から学んだ後に平仮名で五十音図を提示している。色違いの文字から縦読みと横読みを学習する。また長く伸ばして縦に読んだり、横に読んだりもする。それから「は」と「わ」、「を」と「お」、「へ」と「え」の違いや、つまる音について「きつね」と「きって」のような単語から学ぶ。平仮名で五十音図を把握した後に、文中に片仮名の単語を提示し、それらによって片仮名を学習する。最後に平仮名の五十音図を「ひらがなのひょう」、片仮名の五十音図を「カタカナのひょう」という名称で提示している。

教師用指導書によると第一学期における、五十音図の指導の要点については以下のように述べられている。(小学1年・上、p.17)

- 平仮名の清音・濁音・促音・拗音が読めて、書けるようにされる。さらに、入門期全体を三期に分け、「入門編」「基礎編A」「基礎編B」とした。それぞれの指導の時期と、およその観点は次のようである。「入門編」(四月いっぱい扱い)

発音・発声のしかたと、学校生活の基本を身につける。

「基礎編A」(五月から六月中旬までの扱い)

平仮名五十音が読め、ある程度書ける。「は・を・へ」の使い方が分かる。

「基礎編B」(六月中旬から七月までの扱い)

これまでの学習をもとに、文章を書く活動にはいる。

これからの学習の基礎になる読解学習材に取り組む。

一学期の国語学習の初期は「話すこと・聞くこと」活動が主体になる。学習指導要領では、音声言語の重視を強く打ち出しているとしている。また、「ひらがなのひょう」では、五十音図について教師に育てたい力について以下のように述べる。

1. 五十音表の組み立てを理解しようとする。
2. 口形に注意し、正しく発音しようとする。
3. 五十音表を縦横に読むことで組み立てがわかる。

一方小学二年では、片仮名についてより深く学び、片仮名で書く言葉は、動物の鳴き声などであることも習う。小学三年では、国語辞典の引き方については五十音順になっていることを学習する。教師用指導書では、国語辞典の見出しの配列について以下のように説明されている。

1. 五十音順に並んでいる。
2. 清音、濁音、半濁音の順に並んでいる。
3. 促音、拗音は、清音の後に並んでいる。
3. 片仮名書きの言葉で、のばして発音するものは、五十音に置き換えたうえで、五十音順に並んでいる。(小学三年・上、p.154)

小学四年では、「Ro`mazi50-on」を学習する。その際に、ローマ字のところに平仮名を小文字で提示している。ローマ字で書くときに、長く伸ばす音に〔-〕のしるしをつけること、つまる音は次に来る字を重ねて書くこと、小さい「や・ゆ・よ」を「biyo`in」「byo`in」の例から覚える。五十音図によって点字の表も習う。一方学校図書の教科書では小学五年と六年では五十音図についての単元がない。

2. 1. 4 光村図書『こくご』

小学一年生は、「あいうえお」の発音の練習の後に簡単に書ける文字から平仮名を書く練習を始める。次に濁音・半濁音・母音を学習し「あいうえおのうた」から五十音について習う。教師用指導書には、「あいうえお」を使った言葉や遊びうたなど「あいうえお」の魅力が詰まったユニークな本などを読み聞かせると述べられている。その時に目や耳の不自由な人と伝え合うことのできる言葉である手話や点字の「あいうえお」を紹介するとされている。また、アルファベット「ABC」を紹介し、外国の子供たちも日本の子どもたちと同様に文字を学んでいることを伝えるとされている。外国籍の子供がいるときは、その国の文字を児童に知らせるとよいとされている。

その後に五十音図の縦の読みと横の読みを色別の文字によって練習する。書き順をまだ習っていない平仮名をすべて習い、「は」「を」「へ」などの違いや拗音について学習する。その後に拗音も含めた五十音図を平仮名で提示している。それから片仮名についての学習を始め、書き順も習う。片仮名で書くときの、伸ばす音については「ハンバーグ」が、平仮名については「おばあさん」が例として挙げられている。その後に片仮名での五十音図を提示している。

小学二年では片仮名についてより深く学習する。小学三年では、国語辞典の使い方を学ぶ。また外国の文字を使って、日本の言葉を書き表すことができるとしてローマ字で五十音図を提示している。

小学四年では、再びローマ字表を学習し、パソコンでの入力方法についてより深く学習する。ローマ字表について以下のように述べられている。

ア行の音は a i u e o と1字で表している。カ行から下の音は2文字以上が組み合わせられている。ア段の音には全部「a」が付いている。横に読むとカ行の音に全部「k」が付いていると説明され、他の行と段にどんな特徴があるか探させる。その後に点字の「あいうえお」を習う。

小学五年では、仮名遣いの決まりについて学習するがその説明が以下である。

言葉を仮名で書くときの書き表し方を「仮名遣い」という。普通は発音どおりに書くが次のような場合には、決まった書き方がある。

1. 伸ばす音を書く場合

- ア段・イ段・ウ段・エ段の音を伸ばす場合、

「あ」「い」「う」「え」をそえて書く

おかあさん（お母さん）、ちいさい（小さい）、ふうせん（風船）

- オ段の音を伸ばす場合は、「う」をそえて書く

おとうさん（お父さん） きのう（昨日）

2. 「言う」を仮名で書く場合。「言う」は「ユー」と発音することがあり、その場合「ゆう」と書かずに「言う」と書く。

どういうふうに いうまでもない

3. 「ジ・ズ」の発音は、普通は「じ」「ず」と書くが次のような場合「ぢ」「づ」と書く。

- もともと「チ」「ツ」と発音する言葉の前に、ほかに言葉が付いていて、発音が

「ジ」「ズ」に変わる場合

はな+ち → はなぢ（鼻血） て+つくり → てづくり（手作り）

4. 「ワ・エ・オ」の発音を「は・へ・を」と書く場合

ぼくの夢は、教師になることだ。

銀行へ、お金を預けに行く。(小学5年・上、p.44,45)

小学六年では、日本で使う文字として漢字、平仮名、片仮名とローマ字の由来を学習する。教師用指導書には仮名文字についての歴史と知識を得ることは、古典との出会いをする中学生の準備という意味ももっていて、ワ行の「ゐ」が出ている時限があればワ行の仮名などについても簡単に説明しておくといとされている。

2. 1. 5 大阪書籍『国語』

大阪書籍『国語』は、小学校のみである。中学校と高等学校用の教科書は出版していない。小学一年生は、「あいうえお」の発音を単語の発音によって練習する。「あいうえおのうた」からも発音の練習をする。それから「うし」「こし」「くつ」などの単語や「と」「て」のように、簡単に書ける字から学習を始める。すべての子音について書き順も学習した後に五十音図が段と行の色違いで提示されている。そこで五十音図の縦の読みと横の読みを色別の文字によって練習する。その五十音図には濁音・半濁音も含まれている。拗音を学習した後に、文から「わ」と「は」、「え」と「へ」、「お」と「を」の違いを学習する。その後に文中に片仮名を提示し、文から片仮名の学習を始める。片仮名の書き順を習った後に片仮名での五十音図を提示している。最後に平仮名の五十音図と片仮名の五十音図を「ひらがなのひょう」と「カタカナのひょう」として示している。

教師用指導書には、「あいうえお・口形」の主な学習活動として以下のような点を取り上げられている。(小学2年・上、p.69)

- 口形に注意しながら、母音を中心に、一字語、二字語、三字語、四字語の発音の練習をする。
- 清音をはっきりと発音し、一つの語句が何拍でできているかを理解する。
- 濁音・半濁音を含んだ語句についても発音し、何拍でできているか調べてみる。

また五十音図については、「五十音表は、一人で読む、グループで読む、例とともに読む、全員で読む、ゆっくり読む、速く読む、大きな声で読む、小さな声で読むなど基本的な口形や発音のしかたを大切にしたいうえで、様々な読み方の工夫をしたい」と述べられている。

小学二年では、片仮名で書く言葉について、外国から入ってきた言葉を書くとき説明され、最後に片仮名の五十音図を提示している。

小学三年では国語辞典の引き方を学習する。そして点字の表を五十音図によって学習する。また五十音図によって《指文字のれい》を学習する。その時に、指文字について以下のように説明されている。

指文字は、指の数、手の表やうら、かたむきや動きの組み合わせによって、五十音を表す。例えば、てのひらを相手のほうに向けて、親指だけを立てるようにしたら「あ」である。

教師用指導書では、国語辞典の配列における「五十音図」は、濁音・促音・拗音を全て清音に置き換えて考えたものであることに留意する必要があると述べられている。またその原則は以下のように示されている。

1. 五十音順 「火」(ひ・一文字) → 「ピアノ」(ひあ・)
2. 次に清音→濁音の原則 「ひ」→「び」(→「び」) (小学3年・上、p.226)

一般の辞典には、促音、拗音の配列を小文字→大文字(「っ」が「つ」としている場合もあ

ると説明されている。

小学四年では、「ローマ字1」の表を学習する。その際に、提示している表は、訓令式の表である。ローマ字表に平仮名を小文字で提示している。ローマ字を使ってパソコンのキーボード入力も学習する。その後に「ローマ字2」の表を提示している。その際に、異なるつづりのあるものも示している。教師用指導書では、仮名による音の表し方に対し、ローマ字では、次のような表記の違いがあることが分かるようにすると述べられている。

一字一音	a	i	u	e	o	n
二字一音	ka	ki	ku	ke	ko	
三字一音	kya		kyu		kyo	

(小学国語・4年・上・教師用指導書、p. 235)

小学五年では、現代語の仮名遣いについて以下のように説明されている。

1. 「ワ・エ・オ」と発音する場合

普通は「わ・え・お」と書くが次のような場合は「は・へ・を」と書く

犬は川へ肉を落としました。

「セー・ネー・レー」など五十音のエの段を伸ばすとき

ねえさん(姉さん) ねえ ええ

音読みの言葉の場合「い」と書く

うんえい 運営 ぜいさん 税金

「ユー」と発音するとき

普通は「ゆう」(とかく(ゆう)がた 夕方)が「言うだけは」「いう」と書く

2. 長く伸ばして発音する場合

「オー・コー・ソー」など、五十音のオの段をのばすとき

普通は「おう・こう・そう」と、「う」を下に添えて書く

おとうさん(お父さん)

次のような言葉は、「お」を下に添える。

おおい 多い おおきい 大きい

3. 「ジ」「ズ」と発音する場合

普通は「じ」「ず」と書くが、(もみじ)

二つの言葉が合わさって、後の言葉の「ち」「つ」がにごった音になったとき

はなぢ - はな(鼻) + ち(血)

「ち・つ」が続き、後の「ち・つ」がにごった音になったとき

ちぢむ つづく(大阪出版・小学5年・上、p. 70, 71)

教師用指導書によると、現代仮名遣いについては、上記した三つの条件が学習活動の指導のポイントとされている。その後に歴史的仮名づかいを学習する。小学六年では、平仮名と片仮名の歴史的な成り立ちについて学習する。指導書によると、万葉仮名から平仮名そして片仮名へと、文字が生み出された過程を様々な資料を活用しながら理解できるようにしたいとされている。また仮名の成り立ちやできた理由や必要性の理解を教材の狙いとしている。「思い出辞典」を作ろうという項目では、国語辞典や百科事典が五十音順になっていることについて学ぶ。

以上の教科書を出版社とともに観察すると出版社によって大きな差が見られず、小学一、二年では、五十音図を「ひらがな」と「カタカナ」で学び、三年で国語辞典、四、五年でローマ

字の表やコンピュータでの入力方を学習するとまとめられる。いわゆる小学校で「五十音図」によって日本語の音声で文字に基づいて学習するといえる。

3. 中学校

大阪書籍は中学校の国語教科書を出版していないので、他の出版社をみる。

3. 1 教育出版

中学一年では、古典の学習がはじまる。教師用指導書によるとまず、古典について知り、現代語との違いを確認し、古典の仮名遣いや古典の言葉を学習させるようにしている。小学校では日本語の文字を中心とした教育だったが中学校では、日本語で使われている音について学習する。日本語が不自然にならない程度にできるだけ短く区切った音の単位は音節であると説明し、五十音図は、日本語の仮名文字を規則的に並べたものであると同時に日本語の音節を規則的に並べたものということもできると説明している。またその原則として、横の列（段）に同じ母音が、縦の列（行）に同じ子音が並べられ、ア行は母音のみ、ア行以外は「t o」「r i」のような「子音+母音」で作られていると説明している。日本語の音節は、五十音図に示されているもののほかに、「が」「ぶ」のような濁音、「ぱ」「ぶ」のような半濁音、「きゃ」「じゅ」のような拗音と促音、撥音などがあると説明する。一方教師用指導書では、日本語の音節が、五十音図にならって規則的に以下のように並べられている。

ラ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	清音
リ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	
ル	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	
レ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	
ロ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	
		パバ ピビ プブ ペベ ポボ		※ ダ 「ジ」ヂ ※ 「ズ」ヅ ※ と デ 同 ト じ 音	ザ ジ ズ ゼ ゾ	ガ ギ グ ゲ ゴ	濁音・半濁音
リャ	ミャ	ピャピャヒャ	ニャ	ヂャチ	ジャシ	ギャキ	拗音
リュ	ミュ	ピュピュヒュ	ニユ	ャ	ャ	ャ	
リョ	ミョ	ピョピョヒョ	ニョ	ヂュチ	ジュシ	ギュキ	
				ユ ヂョチ ョ	ユ ジョシ ョ	ユ ギョキ ョ	

『教育出版・伝え合う言葉・教材研究編・第3部』(p.22)

ここでは、清音と濁音、半濁音との関係、拗音は「ア行」「ヤ行」「ワ行」以外のイ段の音に

「ヤ」「ユ」「ヨ」を添えて作られるのが原則であるように提示したとされている。また、古典にある「ゐ(ヰ)」や「ゑ(ヱ)」などを五十音表に位置づけたり、オノマトペや外来語に用いられている拗音を挙げさせたりして、文字とは固定された不変のものではないことに気づかせるとされている。日本語の音韻についても学ばせる。教師用指導書に五十音図については、

「音韻を体系化した図表である。縦に子音の違い、横に母音の違いを配し、交差する点に該当する音を仮名で表している。また、[仮名で示す]という仕組みであるため、五十音図の音をすべて網羅することができないのが日本語の特徴である。濁音・半濁音、拗音、促音、撥音がそれにあたる」と説明されている。

また中学一年では、品詞分類自立語と付属語、活用があるものやないものを説明する。活用がある自立語は用言で、活用がある付属語は助動詞であると簡単に説明する。

また、「五十音図」によってローマ字が示され、「ローマ字のつづり方」については、「ヘボン式」「日本式」「訓令式」などがあると学ぶ。

中学二年では一年で学んだ品詞分類の活用について五十音図で学習する。ここでは、動詞の活用は五種類にまとめられると説明している。

五段活用は五十音図のアイウエオの五つの段にわたって活用する。

- 五段活用 → ア段 — 「話す」は 「サ行五段活用」
- 上一段活用 → イ段 — 「おきる」は「カ行上一段活用」
- 下一段活用 → エ段 — 「開ける」は「カ行下一段活用」
- カ行変格活用 → 「来る」の一語
- サ行変格活用 → 「する」と「〇〇する」のみである。(中学2年、p. 205)

さらに、昔の「五十音」も学習する。五十音図以外に日本語の仮名や音節を整理したものとして「いろは歌」、「たみにの歌」や「あめつち」を取り上げている。いろは歌については、五十音図の五十文字からヤ行の「い」「え」、ワ行の「う」の三文字を抜いた数、四十七文字をまんべんなく使って作った歌で、これによって全ての仮名を書くことができるため、主に文字の練習をするための手習い歌として、平安時代以降に用いられたものであると説明する。そこでは現代と違い「い」「え」という仮名とは別に「ゐ」「ゑ」という仮名があったことから、当時には「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」がそれぞれ別の音で発音されたと考えられると述べられている。いろは歌以前に存在するものとして「たみにの歌」を取り上げ、この歌はいろは歌と同様に四十七文字を織り込んだ歌であり、五・七調であると説明する。さらに古い歌として、五音と七音で構成される「歌」の形式を取っておらず二音の言葉の羅列でできた「あめつち」を説明する。「あめつち」には四十八文字があり、それはア行の「え」とヤ行の「え」を表していると考えられると述べ、当時はア行の「え」とワ行の「ゑ」のほかにはヤ行の「え」の区別を反映していると考えられると述べ、古典の仮名遣いでは、「歴史的仮名遣い」と「現代仮名遣い」との異なる部分について以下のように「五十音図」で説明する。

- 1 語中・語尾の「はひふへほ」 → 「ワイウエオ」 あはれ — アワレ
- 2 「む」「なむ」 → 「ン」「ナン」
- 3 次のような母音の連続 → 伸ばす音に
 - ア段+「う・ふ」 → 「オ段」の長音 (au → o)
 - イ段+「う・ふ」 → 「〇ユウ」 (iu → yu)

エ段+「う・ふ」 → 「〇ヨウ」 (eu → yo)

4 「ゐ」「ゑ」「を」 → 「イ」「エ」「オ」

5 「ぢ」「づ」 → 「ジ」「ズ」

6 「くわ」「ぐわ」 → 「カ」「ガ」 (中学国語1、p.22)

中学三年では、二年で学んだ「仮名遣い」を念頭に置きながら古典文学を学習する。

3.2 東京書籍

中学一年では、歴史的な仮名遣いと現代仮名遣いについて学習し、それから五十音図で用言の活用や平仮名とローマ字なども学ぶ。その際に平仮名の表とローマ字の表を並記し、ローマ字表と比べ、平仮名の表の音は、母音、及び母音と子音が結びついたものであると学習する。中学二年では用言の活用をより深く学習し、中学三年で送り仮名を学習する。

3.3 学校図書

中学一年では、歴史的仮名遣いや現代仮名遣いとはどういうものかについて学習する。歴史的仮名遣いで書かれた文を現代の発音で読むときの注意点としては以下の3つの点が取り上げられている。

1. ワ行の「わゐうゑを」は、「ワイウエオ」と発音する

例：まゐらす → マイラス

2. 語中や語尾にあるハ行の「はひふへほ」は、「ワイウエオ」と発音する。

例：食はず → 食ワズ 思ひ → 思イ

3. 次のような母音が重なる場合には、長音で読む

例：1. 「アウ」 → 「オー」 「やう」 → 「ヨー」 [yo:]

2. 「イウ」 → 「ユー」 「言ふ」 → [yu:]

3. 「エウ」 → 「ヨー」 [eu] → [yo:]

4. 「オウ」 → 「オー」 おもふ(思う) → 「オモー」 [omo:] [ou] → [o:]

4. 助動詞「む」、助詞「なむ」などの「む」は、撥音「ン」と読む

例：造となむ → ナン [nan] 試みてむ → ン [n]

5. 長音・撥音(ン)・促音(ッ)で発音する場合、

例：こよなう → コヨノウ うつくしうて → ウツクシユウテ

何せむ → 何セン あつぱれ → アッパレ (中学1年、p.184)

一方教師用の研究・解説では、日本語の仮名遣いの歴史については、上代仮名遣い、定家仮名遣い、契沖によって書かれた『和字正濫鈔』による歴史的な仮名づかい、現代仮名づかいなどの説明がある。また「歴史的仮名遣い」とその読み方を一括して学習させていくのが学習の狙いといっている。

中学二年と三年では、動詞の活用について五十音図で学習する。その際に五十音図を提示し、五十音図の段と行で動詞の活用が説明されている。また点字や指文字についても再び学習する。教師用指導書では日本語の音の体系を確かめると共に、それを表わす文字「点字・指文字」を知識として身につけさせたいとされている。そのために日本語の五十音図があり、こういったことは日本語の使い手として知っておいてよいと述べられている。

3. 4 光村図書

中学一年では、古典を学習する。その時に「いろは歌」が記載され、「いろは歌」については、四十七文字の仮名を一回ずつ使って作られていると説明されている。「いろは歌」の歴史にも述べられている。中学二年と三年では、動詞の活用を学習する。

以上から中学校の国語教育では日本語の「音韻」を中心に形成しているといえる。

4. 高等学校から大学

4. 1 教育出版

高等学校では中学校で学んだ現代仮名遣いと歴史的仮名遣いについて復習し、歴史的仮名遣いの読み方の原則を学び古語と現代語との違いについて学ぶ。また、五十音図は歴史的仮名遣いや用言の活用を習得する時に大切だが、いろは歌は平安時代中期に書き分けられていた仮名四十七文字を一度ずつ用いた手習いの詞の一つであると説明されている。大修館書店による教師用指導書では、五十音図についての歴史的な背景を以下のように述べている。

平安時代に、漢籍や仏典を読むために中国語や梵語（サンスクリット）を学んだ日本人の僧や学者たちが、その知識を使い、日本語の仮名を、試みに子音と母音の組み合わせとして分析したのが、五十音図の始まりである。「五音（ごいん）」などと僧や学者たちの中で呼ばれていた表は、アイウエオ順の母音とアカサタナ順の子音の組み合わせに固定して、五段十行として定着したのは江戸時代である。（そして、すでに江戸時代の古語の用言の活用を説明するためにこの五十音図が用いられていた。）もともと子音と母音の組み合わせによってどのような音になるかの解説表なので、ア行のイ・エがヤ行（yi, ye）にもア行のウがワ行（wu として）にも重複して配置され、合計五十音になっている。撥音の「ン」が子音「N」あり、一音節として確立した時期が遅いため、本来の「いろは歌」や「五十音図」に入っていない。「ゑひもせす・ん」や「ワキウエヲ・ン」のように最後に追加することが多い。（p. 33）

なお、教室では、まず、ワ行の仮名ゐ・ゑの位置と、片仮名での書き方をしっかり確認し、それから、この順序が古典辞典の配列順であり、古典文法で動詞など用言の活用をとらえる基本にもなっていることに気づかせたいとされている。

また、高等学校では古典文法を五十音図で学ぶ。中学校で学んだ動詞よりも動詞の種類が増える。古代語から現代語への動詞の活用の変遷を学ぶ。

大学では専門分野により、より深く五十音図について研究する。また、助動詞の活用は同じ行で活用しているなどのことについても学ぶ。

4. 2 東京出版

東京書籍による『精選国語総合』では、歴史的な仮名遣いと現代仮名遣いについて学ぶ。そして歴史的な仮名遣いで書かれた文章を読む時の注意すべき点については、教育出版と同様な説明をしている。五十音図については以下の説明がある。

古文では四十七文字の仮名が用いられ、その全ての仮名を音声の種類によって配列した表

を五十音図という。五十音図は、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の活用を理解するうえでも重要である。なお、四十七字の仮名を重複しないように用いて作られたものに「いろは歌」がある。

東京書籍『新編国語総合』と『国語総合』の教科書でも同様な説明がされている。五十音図によって古典文法や古典語や現代語の動詞の活用をより深く学ぶのである。

5. 日本語教育における五十音図

外国人の日本語学習者が日本語を学ぶ際に多く使用されている『みんなの日本語』では五十音図については、「日本語の発音」という名称で、仮名と拍が説明されている。五十音図を平仮名と片仮名の両文字で最初に提示している。長音については「おばさん」と「おばあさん」や「カード」などの例が取り上げられている。また撥音「ん」と促音「っ」については「ぶか」と「ぶっか」などの例から説明する。また拗音については、「ひやく」と「ひゃく」などの例が取り上げられている。

また、『新日本語の基礎』では「日本語の発音」という項目で、「日本語の音節」として五十音図が取り上げられる。また母音を短母音と長母音に分け、「おばさん」と「おばあさん」、「え」と「ええ」などが例として取り上げられる。二重子音（促音）に「おと」と「おっ」とのような例を取り上げ、子音+や、ゆ、よ（拗音）には、「ひやく」と「ひゃく」のような例を取り上げ、「ざ、ず、ぞ」と「じゃ、じゅ、じょ」として「ざあざあ」と「じゃあじゃあ」の例を取り上げている。「す」と「っ」については「いす」と「いつ」などの違いから説明されている。

外国人の日本語学習の際によく使用されるこの二冊では濁音と半濁音については説明されていない。一方『みんなの日本語』の教師用教え方の手引きでは、五十音図をみて、「あいうえお」の練習をさせ、その後「カ行」以下も順番に清音を練習させ、次に「゛」のある濁音、「ㇰ」のある半濁音の練習に移り、清音・濁音・半濁音を練習させ、その次に小さい文字「ゃゅょ」の拗音の練習をする、と述べられている。ここでは、発音の仕方と注意点を学ぶが仮名の書き方についての指導は特に行わないとされている。ここでの、「あいうえお」の練習は「T」は「Teacher(先生)」の後に「S」は「Student(学生)」繰り返して発音するという形を取っている。

一方これらの二冊の日本語版では、日本語の「五十音図」の発音を記載していないが英語版では、ローマ字で発音が記載されている。現在訳されている他の外国語の版では各言語で発音の符号が付されている。

6. まとめ

本論文では、日本語の五十音図が国語教育の始まりである、小学1年生からどのように習い、どのように把握していくかについて考察した。その結果、日本の小学校では、日本語の発音と文字として平仮名と片仮名を学び、それによってコンピュータで文字を入力するときのローマ字の使用法、ローマ字の「点字の表」「指文字のれい」などを学習することが明らかとなった。一方中学校では、五十音図についてより具体的に把握していく。次に、五十音図によって古典文法の活用を学習する。その時に五十音図の歴史もおおまかに学び、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いについても学ぶ。

高等学校では、五十音図により現代仮名遣いと歴史的な仮名遣いについて学び、大学では専門により歴史などを学ぶのである。

最後に、上記のことから日本語の五十音図は現代国語教育では、重要な役割を果たしていることが明らかであるが、日本語教育では、これを国語ほど重視していない。ごく初級段階の、発音と文字の導入で扱うに留まる。このように重大な役割を果たしている「五十音図」は日本語教育でももっと活かすべきではないだろうか。また、このような対照について歴史的な背景を見る必要があると考えている。

参考文献

- 教育出版 (2005) 『ひろがることば』国語教科書・小学校一年から六年まで
 教育出版 (2006) 『伝え合う言葉』国語教科書・中学校一年から三年まで
 教育出版 (2006) 『国語総合』高等学校・国語教科書
 教育出版 (2006) 『新国語総合』高等学校・国語教科書
 教育出版 (2005) 『ひろがることば』教師用指導要領・小学校一年小学六年まで
 教育出版 (2006) 『伝え合う言葉』教師用指導書・中学校一年から三年まで
 教育出版 (2006) 『高等総合』高等学校・教師用指導書
 大阪書籍 (2004) 『国語』国語教科書・小学校一年から六年まで
 大阪書籍 (2004) 『国語』教師用指導要領・小学校一年から六年まで
 学校図書 (2005) 『こくご』国語教科書・小学一年から六年まで
 学校図書 (2005) 『こくご』教師用指導書・小学一年から六年まで
 学校図書 (2006) 『中学国語』教科書・中学校一年から三年まで
 学校図書 (2006) 『中学国語』教師用指導書・中学校一年から三年まで
 東京書籍 (2005) 『新しい国語』国語教科書・小学校一年から六年まで
 東京書籍 (2005) 『新しい国語』国語教科書・中学校一年から三年まで
 東京書籍 (2007) 『新しい国語』教師用指導書・小学校一年から六年まで
 東京書籍 (2007) 『新しい国語』教師用指導要領・中学校一年から三年まで
 東京書籍 (2007) 『精選国語総合』高等学校・国語教科書
 東京書籍 (2007) 『精編国語総合』高等学校・国語教科書
 東京書籍 (2008) 『精選総合国語』高等学校・古文編・教科書
 東京書籍 (2008) 『精選総合国語』高等学校・現代文編・教科書
 光村図書 (2005) 『こくご』国語教科書・小学校一年から中学校まで
 光村図書 (2005) 『こくご』教師用指導要領・小学校一年から中学校まで
 スリーエーネットワーク (2005) 『みんなの日本語』
 スリーエーネットワーク (2005) 『みんなの日本語』・教師用教え方の手引き
 スリーエーネットワーク (1990) 『新日本語基礎』